

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 6 日現在

機関番号：34523

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25883010

研究課題名(和文)八重山諸島石垣島における台湾系集落の居住環境と空間構成原理

研究課題名(英文)Living Environment and Space Structure of Taiwanese Villages in Ishigaki Island

研究代表者

長野 真紀(NAGANO, MAKI)

神戸芸術工科大学・芸術工学研究科(研究院)・助手

研究者番号：10549679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、八重山諸島石垣島名蔵集落と嵩田集落に居住する台湾系住民の集落立地と居住環境、住まい方と地域文化について、集落・生活・コミュニティの視点から明らかにした。石垣島では様々な歴史的要因により村建て、廃村、村移動が繰り返し行われ、年代によって集落の場所や規模、数が大きく変容していった。そのような環境下において、昭和初期に島外から移住してきた台湾の人々が、どのように住環境を構築し民族アイデンティティを継承してきたのか、現地調査と歴史的文献・資料を用いて、その史的変遷と石垣島での暮らし方について分析を進めた。

研究成果の概要(英文)：This paper clarifies the location of the settlement, residential environment, local culture, and way of living of Taiwan people residing in the Nagura and Takeda settlements in Ishigaki Island of the Yaeyama Islands, from the perspectives of settlement, way of life, and community. Due to various historical factors, Ishigaki Island has witnessed the phenomena of village building, deserted villages, and village transferring. Further, depending on the generation, the location, size of the settlement and the number of settlements has changed drastically.

How have the people of Taiwan who had migrated and come from outside the island in the early Showa period built their residential environments and thus inherited their ethnic identity in the environment described above. Through field surveys and using historical documents and materials, this paper explores the historical transitions and way of life in Ishigaki Island.

研究分野：環境デザイン

キーワード：台湾系集落 石垣島 居住環境 空間構成 立地特性

1. 研究開始当初の背景

(1) これまで、台湾に居住する少数民族の客家、原住民、福佬客を対象に、集落・居住空間の構成原理について研究を進めてきた。歴史的、地理的条件が空間概念の形成に影響を与えた多様なかたちの背景を探りながら、東アジア固有の文化を背景に形成された集落空間・居住環境の重要性を認識するに至った。

(2) 現在まで東アジアの居住空間をテーマに、次の研究を行ってきた。①「台湾福佬客の居住環境と空間構成原理に関する研究」、②「東アジアの稲作文化における集落・居住空間と伝統的環境観に関する国際比較」、③「台湾原住民の集落移動と集住環境の空間構成原理に関する研究」、④「台湾客家集落の立地選定と空間構成原理に関する研究」、⑤「集落形態の類型別特性から捉えた客家集落の居住環境と居住文化に関する研究」。これらの主に台湾を研究対象にした集落研究では、客家、原住民、福佬客が歴史的背景に持つ「移住」を共通テーマとして扱ってきた。客家は度重なる戦乱や異民族の襲来から逃れるため、原住民は自然災害や日本統治時期に行われた政府の移住計画によるため、福佬客はよりよい適地を求めて自然豊かな場所へ移住を繰り返してきたことが要因として挙げられる。「移住」という集落構成に大きな影響を与えた歴史は共通するが、その要因や背景は大きく異なる。しかしながら、彼らは移住の先々で、その土地の風土や気候に順応しながら族群独自の生活や文化・慣習を継承し、固有の環境観を持続させてきた。移住文化の視点から集住環境を捉え、新しく居住空間を構築する際に指標とされる住まい方の原理を解明することで、周辺環境に適応し、長く住み続ける「居住の知恵」を明らかにすることができるのではないかと認識するに至った。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、沖縄県八重山諸島石垣島に居住する台湾人(福佬人)集落の立地と居住環境、住まい方と地域コミュニティを、歴史的居住空間が持つ民族アイデンティティと捉え、集住環境の構成原理として探究することを目的としている。血縁・地縁の延長としての地域社会の成り立ちが受け継がれている沖縄において、異民族である台湾からの移住者が、どのように居住環境を構築し、文化・伝統を発展させていったのか、「集落のかたち—立地環境・集合原理」、「生活のかたち—住まい方・暮らし」、「コミュニティのかたち—地域社会・伝統行事」に焦点を当て、研究を進めていく。台湾から八重山への移住は1940年代に始まり、現在、移住当時の様子を知る人々の高齢化が進んでいる。現地調査や聞き取り調査を中心に、当時を知る人々の記憶を辿りながら、居住環境の変遷と空間が持続する普遍的な仕組みを明らかにする。

(2) 本研究は2年間の研究期間の内、第1に、地籍図・地形図・文献を用いて、台湾から石垣島に移住してきた当時の集落の立地形態およびその周辺環境を明らかにする。研究対象地は、石垣島於茂登岳を望む嵩田山の裾野に広がる名蔵・嵩田の両地域を選定し、空間の歴史の変遷を読み解く。

第2に、現地での聞き取り調査・生活調査を通して、現在の住空間と住まい方について明らかにする。住空間は実測により現況平面図を起こし、規模・間取り・間仕切り・設備・部屋の呼び名について調査する。そして、そこで展開されている食事及び就寝場所、水(井戸)、調理の場所、便所・風呂・洗濯、その他特殊な居住習俗などの生活について、詳細に記録する。また、冠婚葬祭、お盆、法事、その他特殊な行事の際に、住居をどのように使うのかも併せて調査し、石垣島に居住する台湾系住民の生活について分析・考察を行う。

第3に、集落の伝統行事に参加し、聞き取り調査・体験調査から地域コミュニティと伝統的慣習について明らかにする。地域独自あるいは民族独自の文化・慣習から集落の共同空間と祭祀空間の構造を読み取り、コミュニティのかたちについて分析・考察を行う。さらに、移住前に居住していた台湾彰化縣の集落調査を行い、名蔵・嵩田両集落との比較・考察から、居住環境の変遷と空間が持続する普遍的な仕組みを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、沖縄県八重山諸島石垣島における台湾系住民の集落(立地環境・集合原理)、生活(住まい方・暮らし)、コミュニティ(地域社会・伝統行事)に主眼を置き、建築学をベースとしつつ、聞き取り調査や地図・文献調査による歴史学的視点と、現在の生活空間を忠実に且つ客観的に調査する考現学的視点から、居住空間と環境観を明らかにする。(図1)

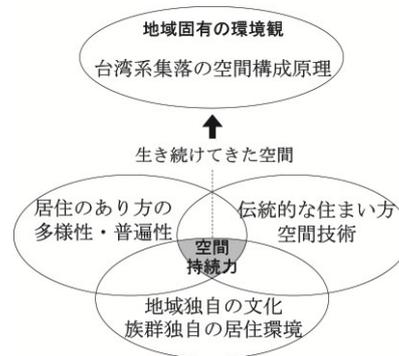


図1. 研究の方法と構成

(2) 人間の社会生活の舞台である集落を形態(集合原理と形状)、立地(場所と環境)、成因(経緯と地域社会)に分類し、移住の歴史と関連づけながら族群固有の空間構成原理を解明する。一般的に集落とは土地の定着や住居の集まりを総称したものを指すが、本研究

では『共同の社会生活を営む住居の集まりで、地域の農地や水路、諸施設と交通路などの空間を含めた社会生活の本拠となる場所』と定義し、その空間の構成に影響を与える最小空間要素、さらにはその組み立てを解明し、八重山諸島石垣島台湾系集落（名蔵・嵩田）における普遍的な仕組みを明らかにする。さらに、人間存在の具体的、直接的かつ総合的な環境である生活を、今和次郎が提唱した考現学の視点から捉えていく。ここでは、対象とする集団の中に現地参加し、共に生活をしながら観察を重ね、生活者の立場に立って理解を深めていく。住居・住まい方・社会生活を通して相互の関連、あるいはバランスを重視しながら、生活の仕組みと生活構造を明らかにしていく。

4. 研究成果

(1) 本研究は、沖縄八重山諸島石垣島に住居する台湾系集落の空間構成原理について、「集落」「生活」「コミュニティ」のかたちを焦点を当て、調査・分析を進めてきた。石垣島では様々な歴史的要因により村建て、廃村、村移動が繰り返し行われ、年代によって集落の場所や規模、数が大きく変容していた。その中で、昭和初期に島外から移住してきた台湾の人々が、どのように住環境を構築し民族アイデンティティを継承してきたのか、現地調査と歴史的文献・資料を用いて、その史的変遷と石垣島での暮らし方について研究を進めた。広域には住環境の立地特性と空間構造、狭域には住居と生活習慣、伝統行事について調査を行い、台湾独自の空間特性を読みながら比較・考察を行った。居住環境の変遷と空間が持続する普遍的な仕組みについて、石垣島と台湾に見る3つの「かたち」をまとめた。

(2) 「集落のかたち」では、初めに名蔵と嵩田集落の歴史と人口移動について内容を整理し、米軍撮影空中写真や明治期の地図を用いて集落地理位置と自然環境についてまとめた。地名と河川名から地形の特徴や自然形態などの環境条件を読み取り、地名・河川名を落とし込んだ地図を作成した。また、集落を小字に分類し、昭和30年代の写真と対比させながら開拓当時の自然環境を読み取った。そして、嵩田集落北部に位置する旧カード地区（美和部落）の当時の過酷な環境について、聞き取り調査や地域の歴史文献から考証した。両集落の空間機能を居住域・聖域・生産域に分類し、土地の利用と空間配分を概念図としてまとめ、一筆調査図と旧土地台帳を用いて明治期から昭和初期の名蔵・嵩田集落の地目・地番・所有者を明らかにし、住居の分布とその経年変化を追った。名蔵集落では、多くの住居が場所を移動せずに立地している一方で、嵩田集落では10年・20年単位で住居が移動または消滅しているが、住居の増減を繰り返しながら現在まで住環境を持続していることが明らか

になった。（図2）

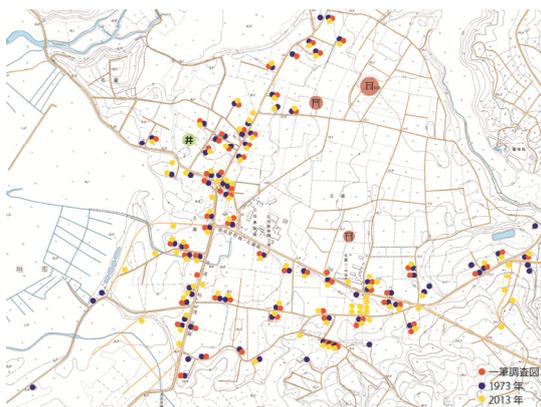


図2. 上：名蔵地籍集成図航空写真（2014年）
下：名蔵における住居分布の経年変化

さらに、石垣市教育委員会市史編集課が保管している寄留簿を用いて、石垣島に寄留する前の居住地（寄留元）について調査を進め、名蔵37世帯、嵩田70世帯の寄留元を明らかにした。そして、寄留簿から明らかになった居住地を可視的に捉えるため、日本統治時代の1906年に作製された臺灣堡圖（2万分の1の地形図）を用いて、名蔵集落寄留元19地域、嵩田集落寄留元36地域における、当時の立地環境及び集落形態について比較・分類した。それらを台湾地形図の上に再度落とし込み、地勢断面から環境特性を読み取った結果、先行研究で明らかになった福佬人集落に代表される立地環境が選定されていることが明らかになった。また、土地利用から住居集合を見ていくと、①塊状集落（終結型）、②散居集落（離散型）、③列状集落（列隊型）、④密居集落（密集型）、⑤その他に分類され、名蔵集落は列状集落、嵩田集落は散居集落の形態を有していることが明らかになった。

台湾（寄留元）と石垣島（寄留先）の歴史的背景を追いながら、石垣島で新たに居住地を形成した寄留者の居住空間・集落立地環境について明確にすることができた。

(3) 「生活のかたち」では、既往研究で調査した台湾現地の住居写真や書籍から図を用いて、台湾人の住まいと生活環境について分析を進めた。台湾住居は一條龍、単伸手、三合

院、四合院、多護龍院護厝、多院落大厝の6種類に分類され、それら住居内部の空間構成について、事例写真を用いてまとめた。また、名蔵・嵩田集落に居住していた現地の台湾人に、移住当時の生活の様子を聞き取り調査し、生業、生活用品、食事、地域行事、言語について、台湾と石垣島の生活慣習について比較・分析した。

1950年代までは多くの世帯が茅葺住居で暮らしていたが、当時の写真からは、日本式・台湾式の別がなかったことを読み取ることができた。さらに、嵩田集落に現存している2軒の台湾式住居（三合院）と、名蔵・嵩田集落内を何度も移動した一世帯に焦点を当て、住まいの間取りと日常生活についてまとめ、次のような結果が得られた。①1960年代に一條龍を建設した世帯では、最大10人が暮らし、食事や言語、日用品、生活慣習も台湾式を継承していた。②名蔵・嵩田集落内で住まいを5回移した世帯では、家族の増加とともに住居を建設して移動を行ってきたが、台湾式の住まいに暮らしはじめたことは一度もなく、石垣島で新しい生活の型を生み出していた。③1950年代に一條龍を建設した世帯が居住する住居は、両端に建つ倉庫とともに三合院の形態を有している。実測調査の結果、内部は台湾の居住空間が形成されているが、細部空間や建築様式には日本式の要素も取り入れられていることが明らかになった。（図3）

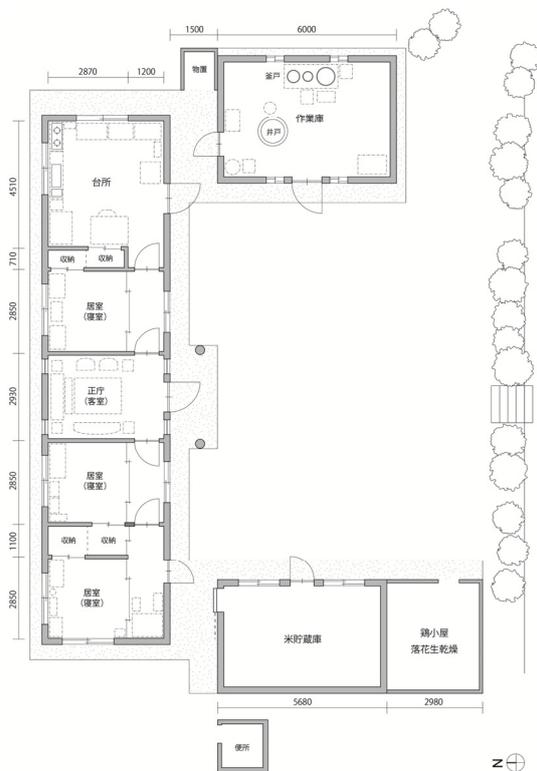


図3. 台湾式住居・倉庫の間取り一例（2014年）

さらに寄留簿を用いて、台湾のみならず両集落に居住していた住民の寄留元と家族構成を調査し、記録が残る大正7年から昭和34年までの42年間の生活環境について分析した。

一世帯あたり1～23人の家族構成を持ち、沖縄や与那国島、宮古島の他、製糖工場に関係する本土からの寄留者も多かった。名蔵集落には台湾より日本国内からの寄留者が多く、嵩田集落より20年早く開墾が始まった。一方、嵩田集落に寄留していた105世帯のうち70世帯が台湾人で、嵩田集落に多くの台湾寄留者が居住していたことを明示することができた。1951年には旧カード地区と呼ばれる雑木林が繁茂する未開墾地への強制移住も行われ、当時の生活の様子についても聞き取り及び文献調査から明らかにすることができた。台湾の住居と石垣島での暮らしを追いながら、台湾からの寄留者がどのように居住環境を構築し、日々の生活を営んできたのか、寄留簿や歴史資料、居住者の声を聞きながら、当時の暮らしについて探求した。

(4)「コミュニティのかたち」では、石垣島の中で生き続ける台湾の伝統行事—清明節、旧盆、土地公祭について、現地調査に基づいた歴史的内容と現在の祭祀の様子をまとめた。

①清明節は旧暦の4月5日に行われる家族・親族規模の行事で、地域社会の結びつきが強い地域では集落単位で執り行われる。午前11時から午後1時までの2時間を調査し、参拝方法、供物（三牲）の種類、紙銭など、台湾由来の伝統儀式について確認することができた。清明節は台湾出身者が一堂に介する場であるが、祭祀に関わる全ての慣習が台湾式で継承されているのではなく、八重山の伝統的要素を取り入れながら新たな清明節をつくりだしていた。

②旧盆は旧暦の7月15日に行われる家族単位の祖先供養の行事であるが、台湾の習慣にならって私譜を執り行う世帯もある。午後5時から7時までの2時間を調査し、場所（空間利用）、供物の種類、祭礼方法など、私的空間の中で行われる伝統行事を見ることができた。旧盆は家族と祖先、家族と好兄弟の交流が行われる日であり、様々な供物が準備される。清明節や土地公祭と比べて賑やかに人が集う行事ではなく、静かな空間の中で執り行われる。（写真1）



図4. S家の入口前私譜用供物（2014年）

③土地公祭は旧暦の8月15日に行われる集落単位の行事で、地域の中の聖域（名蔵・

嵩田集落では御嶽)が祭祀空間となる。午前9時から午後1時までの4時間を調査し、名蔵御嶽の使われ方、参加人数、祭礼方法、焼金、豚奉納など、1940年代から続く祭祀の流れと、そこに集う人々の関わり方について調査した。土地公祭は、現在、名蔵・嵩田集落から離れて市街地に居住する台湾人のコミュニティの場としても大きく機能していることが明らかになった。

調査した3つの伝統行事は、集団生活圏に居住する人々の間に形成される文化であり、台湾から石垣島へ移ってもその行事や空間は、かたちを少しずつ変容させながら継承され、生き続けている。苦労した時代を共に生き、地縁・血縁以上の関係で築かれた台湾コミュニティは、故郷での暮らしを忘れず、台湾アイデンティティを継承していこうとする強い意識のもとにあり続けているようにも感じた。「伝統行事」が持つ言葉や空間の意味と、移住先の新しい土地で受け継がれる文化の力を見ることができた。

(5) 日本の最南端に位置する沖縄八重山諸島は、多様で複雑な世界観を持っている。そして台湾もまた、周囲を海に囲まれた島国であり、独特の慣習や伝統文化、空間構造を継承している。異なる両地域の居住環境や、族群独自の空間原理を深く理解する異文化理解の視野を持ち、固有価値を再評価することができれば、将来の研究発展につながるのではないかと考えている。さらに、対象となる地域と族群の居住環境の構成原理を正しく理解し、それを基盤とすることにより、環境と共存した持続性の高い居住空間を創出できると捉えている。

本研究では、石垣島の名蔵・嵩田集落での現地調査・文献調査の記述と、それに関連する分析を進めてきたが、台湾における福佬人の居住環境について詳細な考察は行っていない。石垣島と台湾の「移住」によって構築された居住環境比較については今後の課題とし、東アジアの集落・住居・生活研究を発展させていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

- ① 長野真紀、八重山諸島石垣島における台湾系集落の居住環境と空間構成原理に関する調査報告1、神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所報告書、査読なし、単著、2014、pp. 88~91
- ② 長野真紀、八重山諸島石垣島における台湾系集落の居住環境と空間構成原理に関する調査報告2、神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所報告書、査読なし、単著、2015、pp. 74~79

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長野 真紀 (NAGANO, Maki)

神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・助手

研究者番号：10549679